

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 26 年 6 月 25 日現在

機関番号：12401

研究種目：挑戦的萌芽研究

研究期間：2012～2013

課題番号：24653114

研究課題名(和文) コミュニティーの喪失と再生の会話分析 「日本人」カテゴリーを中心に

研究課題名(英文) Conversation analysis of loss and regeneration of communities: Focusing on a category of Japanese

研究代表者

山崎 敬一 (YAMAZAKI, Keiichi)

埼玉大学・教養学部・教授

研究者番号：80191261

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,800,000円、(間接経費) 840,000円

研究成果の概要(和文)：本研究では、北米の日系人コミュニティを対象にコミュニティの喪失と再生の歴史とその語りを歴史的・社会的分析と会話分析の手法で分析した。具体的には：(1) アメリカロサンジェルス全米日系人博物館、(2) マンザナー強制収容所、(3) バンクーバーの日系人コミュニティと日系ミュージアム、(4) ハワイの日系人コミュニティとミュージアムの調査を行った。その成果はエスノメソドロジー国際会議等で発表した。また、『日系人の喪失と再生の物語 会話分析・ナラティブ・語られる歴史』として出版する予定である。

研究成果の概要(英文)：In this research, we analyzed narratives and history of loss and regeneration of Japanese American and Japanese Canadian communities in North America, in historical, sociological, and conversation analytic manners. We conducted research in the following sites: (1) Japanese American National Museum in Los Angeles; (2) Concentration camp in Manzanar; (3) Japanese Canadian communities and museums in Vancouver; (4) Japanese American communities and museums in Hawaii. The results of this research were presented in the IEMCA conference. Also, the results will be published in a book titled Narratives of loss and regeneration of Japanese American and Japanese Canadian communities: Conversation analysis, narratives, and oral history.

研究分野：社会学

科研費の分科・細目：社会学

キーワード：エスノメソドロジー 会話分析 日本人アイデンティティ

1. 研究開始当初の背景

東日本大震災と福島第一原発事故後のコミュニティの復興と再生は、現代の日本の最大の課題となっていた。一方、地震や津波に関する伝承の重要性や、復興における物語の重要性（例えば、ロプリータ地震や中越地震における「ものがたり復興」）も指摘されている。しかし、大震災と原発事故後のコミュニティの復興や再生はこれからであり、いかなる物語をコミュニティの再生のモデルにするべきかという問題はこれから考えなければいけない課題となっていた。

2. 研究の目的

この研究の目的は、北米の日系人コミュニティを対象に、コミュニティの喪失と再生の歴史とその語りを歴史的・社会的分析と会話分析の手法で分析することである。また、コミュニティの喪失と再生の物語を、「日本人」というアイデンティティとの関係で提示することである。また、いかにしてコミュニティの再生の物語をこれから構築するかを考察することである。

今回の研究では、北米地域を対象にして、コミュニティの喪失と再生の物語に焦点を当てる。北米の日系人は第2次大戦中にコミュニティの喪失を経験した。また戦後、様々な仕方ですべての地でコミュニティを再生させた。だが、ハワイ、アメリカ本土、カナダにおける第2次大戦中の強制収容によるコミュニティの喪失と再生の歴史はそれぞれの地域で異なっている。今回の研究では、コミュニティの喪失と再生の物語が、人々の置かれた過去および現在の状況によってどう異なるかを歴史的・社会的分析と会話分析の手法で分析する。

3. 研究の方法

この研究では、「日本人」コミュニティの喪失と再生の語りについて研究するために、北米の日系人コミュニティの語りについてのビデオを用いたエスノグラフィー的調査とコミュニティの喪失と再生についての歴史的社会的調査を行った。歴史的・社会的状況の違いと語りとの関係进行分析するため、第2次大戦中の強制収容の形が異なる3つの地域（ハワイ、アメリカ本土、カナダ）で調査を行った。

次の3地域を主な研究対象にした。

- ①ハワイ（ホノルル）
- ②アメリカ本土（ロスアンジェルス）
- ③カナダ（バンクーバー）

この3つの地域を選んだのは、第2次大戦中の強制収容によるコミュニティの喪失と再生の歴史が上の3つの地域で異なっているからである。①ハワイ（ホノルル）では、強制収容された人は一部にとどまっており、コミュニティはハワイ社会の中で存続した。②アメリカ本土（ロスアンジェルス）では大部分の人が強制収容されたが、土地はそ

のまま残っており、同じ土地でコミュニティが再生可能になった。③カナダは、バンクーバーのあるブリティッシュコロンビア地域の大部分の人が内陸部および東部に強制収容されるとともに土地は競売にふされた。漁民等の一部の人は元の土地（現在バンクーバー市となっているスティープストーン地域）に戻ったが、多くの人はカナダの別の土地（トロント等）に広がり、新しいコミュニティを作った。また、ホノルル、ロスアンジェルス、バンクーバーを選んだのは、日系人ミュージアムが存在するからである。特にロスアンジェルスとバンクーバーの日系人ミュージアムは戦時の強制収容の補償で建てられたものであり、強制収容によるコミュニティの喪失と再生の問題を考察するのにふさわしい場所であると思われる。

4. 研究成果

本研究では、北米の日系人コミュニティを対象にコミュニティの喪失と再生の歴史とその語りを歴史的・社会的分析と会話分析の手法で分析した。具体的に、調査を行ったのは次の地域と場所である。(1) ロサンジェルスの全米日系人博物館、(2) マンザナー強制収容所、(3) バンクーバーの日系人コミュニティと日系ミュージアム、(4) ハワイの日系人コミュニティとミュージアム。

(1) ロサンジェルスの全米日系人博物館

ロサンジェルスの全米日系博物館で、ビデオを用いた調査を行った。また、過去に同じ博物館で撮影したビデオデータと比較して分析を行った（図1）。



図1：ガイドと家族（鑑賞者）

この調査で次のことがわかった。

- ①日系人の歴史や収容所や戦後補償の問題の展示が中心となっている。
- ②日本語のガイドか英語のガイドを選べるようになっている。
- ③ガイドは、「日本人」「日系人」「われわれ」対「アメリカ人」「白人」「かれら」といった成員カテゴリーや成員カテゴリー化装置を使い分けている。
- ④観客が誰か（日本人か、アメリカ人か等々）によって、成員カテゴリーの使い方が異なっている。

- ⑤自己物語が、語りの中に組み込まれている。
- ⑥共通の知識を持っているかが、説明の仕方と関連している。
- ⑦ガイドと観客との共通基盤が、成員カテゴリ化や自己語りと、密接にかかわっている。
- ⑧展示物の鑑賞と関連した形で、語りが構成される。

(2) マンザナー強制収容所

マンザナー強制収容所を訪問し、現地調査とビデオ撮影を行った。強制収容所は、実際にそこに行かないと、感じ取れないものがあるという意味で、意義深いものであった。

調査に同行したやまだようこは、次のように書いている。

「砂漠の真ん中で、目の前には大きな山があり、車で、行けども行けども同じ風景がつづく、草木のない岩肌が露出する高い山々、赤茶けた広大な大地、照りつける太陽、水がほとんどない荒涼とした風景。この荒々しい大自然が人間に立ちほだかり、人や生きものを無力にするような威圧的な感じは、緑の山々と清流に満ちた豊かな自然に包まれた日本にいては想像することすら難しいと思いました。ここに移住させられたら、たとえ鉄柵や監視などなくても、とても逃げられないと思わせられました。」(ロスアンゼルス便り 2012年8月8日-15日 やまだようこ)

「1945年に立てられたという慰霊碑は、今回の調査の下調べの段階で写真を何度も見ていたのですが、現地で実物を見ると、風景や土地の大きさに比較してあまりにも小さく見え、ことばを失うほど淋しいものでした。やはり、現地に立って見ないとわからないものだと感じました」(同上) (図2)。



図2 マンザナー強制収容所の慰霊碑

マンザナー強制収容所は現在アメリカの国立史跡になっており、資料館がある。そこでの展示とガイドには次のような特徴がある。

- ①展示の説明はすべて英語である。
- ②ナショナルガードが、収容所の模型に基づき、英語で客観的な説明を行っている。

観客もほとんどアメリカ人であり、日系人強制収容所は、アメリカの歴史として教えら

れているのである。

(3) バンクーバーの日系人コミュニティと日系ミュージアム

バンクーバーでの調査は、郊外の漁師町のスティーブストン、バーナビーのカナダ日系文化センター・日系博物館、第2次大戦勃発前の日本人街であるパウエルストリートで行った。

①スティーブストンでは、日系2世の日系人の再生の物語の聞き取り調査、仏教会での解説場面のビデオ撮影(図3)を行った。

②日系文化センター・日系博物館では、企画展「ものがたり」の解説場面とビデオ撮影、教育用の展示室での収容所の展示と解説場面の撮影を行った。ここでの解説は、基本的に英語であった。

③パウエルストリートで、日系人のツアーガイドのビデオ撮影を行った。ここでの解説は、日本語と英語を選べた。



図3 スティーブストン仏教会での解説場面

(4) ハワイの日系人コミュニティとミュージアム

ハワイでは、ホノルル福島県人会の協力のもとに、調査を行った。ハワイと福島を結ぶ社会的絆プロジェクト、日系人の聞き取り調査、ハワイ日本文化センターでの英語と日本語の解説の録音、ビショップミュージアムでの解説のビデオ撮影(図4)、ハワイ沖縄ミュージアムでの日本語での解説のビデオ撮影を行った。



図4 ビショップミュージアムの解説場面

(5) 全体の成果

同じ日系人博物館でも、展示内容だけで

なく、展示の対象とする観客の違いがあることがわかった。またガイドと観客の成員カテゴリーが説明と関連していることがわかった。人々がどのように共通基盤を見つけるのか、またそのなかでカテゴリー化と自己語りがいかに行われるのかも示すことができた。また他の種類の語りとの関連も、現在分析している。こうした研究の成果は埼玉大学教養学部紀要、エスノメソドロジー国際会議、エスノメソドロジー会話分析研究会等で発表した。また、『日系人の喪失と再生の物語—会話分析・ナラティブ・語られる歴史』として来年10月に出版する予定である。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文] (計 14 件)

- ① 山崎敬一、山崎晶子、池田佳子、社会的プロジェクト、埼玉大学教養学部紀要、49巻第2号、2014、pp.165-173 (査読なし)
- ② 福田千恵、山崎敬一、佐藤信吾、福島ハワイ間の社会的絆支援プロジェクト：日系人のバーチャルな里帰り、埼玉大学教養学部紀要、第49巻第2号、2014、pp.175-181 (査読なし)
- ③ Keiko Ikeda, Decentering and recentering communicative competence. In K. Kataoka, K. Ikeda, & N. Besnier (eds). Special Issue on Decentering and recentering communicative competence, Language and Communication, Vol.33, No.4, 2013, pp.345-350 (査読あり)

[学会発表] (計 6 件)

- ① 福田千恵、小池智哉、日系人ミュージムの語り—ガイドツアーにおけるアイデンティティ/カテゴリーの構築、エスノメソドロジー・会話分析研究会 2012 年度春の例会、2013 年 03 月 30 日、東京
- ② 福島三穂子、コミュニティの喪失と再生の歴史の中での日系人の語り、エスノメソドロジー・会話分析研究会 2012 年度春の例会、2013 年 03 月 30 日、東京
- ③ 池田佳子、岩崎千晶、バイサウス・ドン、インフォーマル学習」を捉える--媒介物(メディア)と、空間と、相互行為に着目して一、「日本語を母語あるいは第二言語とする者による相互行為に関する総合的研究」(第5回国立国語研究所研究発表会)、2013年3月17日、北星学園大学
- ④ 福岡安則、ハンセン病療養所退所者が子どもを産むということ、第29回日本解放社会学会大会、2013年9月7日、放送大学千葉学習センター

[図書] (計 2 件)

- ① Keiko Ikeda, Don Bysouth, Japanese and English as Lingua Francas: Language Choices for International Students in Contemporary

Japan. In Haberland, H., Preisler, B. & Lønsmann, D. Language Alternation, Language Choice. and Language Encounter in International Tertiary Education., Springer, pp. 31-52, (総ページ数 241 頁) 2013 年.

- ② Keiko Ikeda, Don Bysouth, Laughter and Turn-taking: Warranting next speakership in multiparty interactions. In Glenn & Holt (eds.) Studies of Laughter in Interaction., UK, Bloomsbury, pp.39-64, (総ページ数 312 頁) 2013 年.

6. 研究組織

(1) 研究代表者

山崎敬一 (YAMAZAKI, Keiichi)
埼玉大学・教養学部・教授
研究者番号：8 0 1 9 1 2 6 1

(2) 研究分担者

山崎晶子 (YAMAZAKI, Akiko)
東京工科大学・メディア学部・准教授
研究者番号：0 0 3 2 5 8 9 6

榎村志郎 (KASHIMURA, Shiro)
神戸大学・法学(政治学)研究科・教授
研究者番号：4 0 1 1 4 4 3 3

池田佳子 (IKEDA, Keiko)
関西大学・国際部・准教授
研究者番号：9 0 4 4 7 8 4 7

浦野茂 (URANO, Shigeru)
三重県立看護大学・看護学部・准教授
研究者番号：8 0 3 4 7 8 3 0

福岡安則 (FUKUOKA, Yasunori)
埼玉大学・教養学部・教授
研究者番号：8 0 1 4 9 2 4 4

森本郁代 (MORIMOTO, Ikuyo)
関西学院大学・法学部・教授
研究者番号：4 0 4 3 4 8 8 1

関由起子 (SEKI, Yukiko)
埼玉大学・教育学部・准教授
研究者番号：3 0 3 4 2 6 8 7
H23 年度のみ

小林亜子 (KOBAYASHI, Ako)
埼玉大学・教養学部・教授
研究者番号：9 0 2 2 5 4 9 1
H23 年度のみ

(4) 研究協力者

福島三穂子、埼玉大学研究員
福田千恵、埼玉大学研究員

小池智也、埼玉大学文化科学研究科大学院
生